

靴の歴史散歩 ⑧2

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

内田商店の創業者、内田直二（1854－1946）については、『靴産業百年史』（日本靴連盟 佐藤栄孝編 昭和46年刊）の「靴業界の向上につくした人びと」の中で詳細に述べられているので、それを要約しながらご紹介したい。

出身は神奈川の最上寺（現・横浜市北区中川町）で、安政元年（1854）日野教順の四男として生まれた。

明治3年、17歳で東京に出、立身出世の近道は軍人になることと、教導団に入ったが、上官にも恵まれず、なかなか尉官に進めなかったのであきらめ、その後はなぜか刀剣商になったという。

教導団時代に、下宿していた内田直吉（芝桜田兼房町）に人物を見込まれ、養子に入ったが、廃刀令が出たりして、文明開化の時代にいまさら刀屋でもあるまいと、あっさり見切りをつけ、養父と共に靴店を開業したというから、これまた変わり身が早い。

靴店を始めたといっても、靴の知識もなく、ましてや靴のつくり方も知らないから、最初は払い下げの軍靴を買い入れ、それを土橋近くの露店で売るといって毎日であった。

『明治百話』の篠田鑛造は、内田商店が桜田本郷町の交叉点角に店を構える以前から、その奮闘ぶりを見続けてきた一人だったのであろう。

商売が順調に伸びるにしたがって、靴の先進国アメリカやドイツから、靴クリームや運動靴、ゴム靴なども輸入した。

それらを販売するためのカタログ販売にも着目し、全国各地の新聞に広告を掲載、

大いにこれを広めた。「二銭で靴のカタログ呈上」というのが、そのキャッチフレーズであった。

内田商店は、同業他社のように自社工場はもたなかった。信頼する専属の下請けに生産をまかせ、自分は販売に専念するという経営方針を貫いた。

明治42年（1909）に東京靴同業組合（現・社団法人 東靴協会の前身）が設立された時、初代組長・高橋誠治のもとで、内田直二は副組長に推され務めた。以後、大正期までに通算6期も副組長に就任しているから、いかに同業者間に人望があったかが分かる。

関東大震災後は経営を養子の^{ふとみ}二十三に任せ、第一線からは退いたが、趣味の多い人で、晩年は金魚の養殖に凝り、全国品評会で横綱、大関クラスの品種を産出し、表彰状をもらってはよろこんでいたというからほほえましい。

昭和21年（1946）7月、長寿を全うしたかのように、90歳で亡くなった。



内田商店創業者 内田直二